

医家随想



例外のない規則はない

豊泉 清

漢字が満身に読めない総理がマスメディアで話題になった。漢字を誤って読む間際は昔から何人もいた。追加予算の追加を「おいか」と読み、財政破綻の破綻を「はじょう」と読み、脆弱な基盤の脆弱を「きじやく」と読んだ大臣もいた。破綻の綻(たん)や、脆弱の脆(ぜい)の誤読は、字形が酷似している定や危からの連想と思われる。

西欧諸国の政治家は権力と財力と教養の三点セットを備えていた。国家の指導者は何よりも先ず知的エリートだった。

現在の日本の政治家は三点セットのうちの一つが完全に欠落している。

漢字を難しいと感じる理由はいくつもあるが、本稿では「例外」をキーワードとして考察を試みてみたい。

金を「きん」と読む。現金、料金、罰金、貯金など、頭にどんな言葉を冠しても常に「きん」と澄んで読むが、賃金だけは唯一例外的に金を「ぎん」と濁って読む。

江戸時代は高額の通貨が金貨で、現在の一円や五円に相当する一文銭は銅貨だった。一般庶民が日常の経済生活で最もよく使う貨幣は金と銅の中間の銀貨だった。労働の報酬も銀貨で支払われることが多いから、江戸時代には「賃銀」と書

いた。後の時代に経済用語は全て下に金を書くと早とちりした者が賃銀を「賃金」と書き誤ったが、読み方は「ちんぎん」のままだったので、金を「ぎん」と濁る例外的な読み方が定着したと推理してみたら如何なるものだろうか。

では例外という観点から自作のクイズを進呈してみたい。

- 1 達磨
- 2 剽軽
- 3 饅頭
- 4 素麵
- 5 読本

前掲の五つの言葉の共通点は何だろうか。

上達、発達、到達など、達は「たつ」と読むのが原則だが、達磨(だるま)に限っては達を「だる」と読む。達を「だる」と読むのは達磨の一語だけである。

剽軽を「ひょうきん」と読む。軽は「けい」と読むのが原則だが、剽軽に限って軽を「きん」と読む。軽を「きん」と読

むのは馴軽の一語だけである。

頭巾や頭上などの頭は「ず」と読み

先頭や筆頭の頭は「とう」と読むが、饅頭(まんじゅう)の頭は「じゅう」と読む。頭を「じゅう」と読むのは饅頭だけである。

水素や酸素など、素は「そ」と短く読むが、素麵(そうめん)に限って素を「そう」と伸ばして読む。素を「そう」と伸ばして読むのも素麵だけである。

読の音読みは「とく」だが、読本(とくほん)だけは唯一例外的に「とく」と澄んで読む。但し、読本のように上に別の言葉を冠すると、連濁現象で「どくほん」と読む場合もある。また読経(どきよう)の読は「と」と読み、句読点(くとうてん)の読は「と」と読む。読には「とく」「と」「とつ」という例外的な読み方が三つも存在する。

「の」字を「つ」読むのはこの言葉だけという唯一例外的な読み方を探して列挙してみた。但し、「私が調べた限りでは」と

いう条件付きである。以上の考察から、例外的な読み方が混在するから、漢字は難しいと結論できる。もし漢字に一字一音という原則が賞かれていれば、国語学習はきわめて楽なはずである。「例外的ない規則はない」は蓋し名言である。これからも例外的な漢字の読み方を集めて一覧表を作ってみたかと思っている。

羽田沖事故

A氏の悩み(1)

穂刈正臣

昭和五十二年四月、日航機が東京湾羽田沖で墜落事故を起こした。A氏は、その飛行機に航空機関士として乗務していたが、奇跡的に助かった。

やがて彼は定年退職した。私は退職した彼とめつたに会うことはなかった。たまに会うのは日曜日のとあるマージャン屋くらいで、以前の飛行機仲間と独特の口調で会話を交わしながら、楽しそうに

マージャンをしている彼の姿がそこにあった。

三年ほど過ぎたある日、彼は某大学病院に緊急入院した。早速見舞いに行きたかったが、なにやかやとあつたため、入院後三週間ばかりして彼の病室を訪れた。

春とはいえまだ肌寒さが感じられる夕暮れであった。昭和初期に建てられたという三階建ての古い病院の、なんの飾り付けもない真白い壁に囲まれた殺風景な部屋にただ一人、彼はベットによこたわっていた。

その日、彼の病状が良かったのか、それともそろそろ入院生活に退屈さを感じていたのか、彼は私の顔を見るなり、ベットから起きあがり独特の福島弁で自分の体験した「羽田沖事故」について語りはじめた。

「あの事故については、私には人と言えない苦しみがあるんですよ」

それまで、私は彼を「事故で全身に傷を受け、九死に一生を得た、気の毒な被害者」としか思っていなかった。彼が今口にした言葉の意味が一瞬判らなかつた。

彼の話は「時間余りに及んだ。私は持っていた雑誌の空きスペースにメモをとった。やがて語り終えた彼は、帰ろうとする私に、

「日本航空で体験したすべてのことを先生は書き残しなさい。きつと、きつとですよ」

「こゝろには、ひとこと」

丸井英二

どの分野と云つて自信が無いのですが、皆さまの成果の鑑賞から始めさせていただきます。

どうぞよろしく。

東京都文京区本郷2-1-1 順大
堂医学医学部 (公衆衛生学)

と、強い口調で言つた。

彼を見舞つた二日後に、私はシカゴで開催された「国際航空宇宙学会」に出発した。今回の旅程は長く、十三日後に帰国した。

翌日私は、友人から彼が呼吸不全で突然亡くなつたと知らされた。それは余りにも唐突な知らせであつた。あのよつな事件の中でも奇跡的に助かつた人という思いもあつてか、彼の死が信じられず、悲しみより驚きのほうが先であつた。私が病室を去るとき、彼は弱りきつた体を部屋の出口まで運び、別れ際に言つた。

「きつと、きつとですよ、先生」
あの念押しという言葉が、彼の遺言でもあつたかのように私には思えた。

翌日、信濃町のお寺で行われたお通夜に出かけた。手を合せながら祭壇を見上げると、彼のにこやかに微笑む写真はも

う何も語つてくれなかつた。

話は羽田沖事故の前に遡るが、その晩運航乗務員宿舎である福岡東急ホテルの一室で、彼は、羽田から一緒にフライトしてきた片桐機長の今後の処遇についてひどく悩み苦しんでいた。

羽田を出発する前日、日本航空羽田オペレーションセンターにある国内線運航乗員部の会議室で、部長と副部長四人、そして彼の六人で会議が開かれた。会議の議題は「体調が悪いのではないか」などと、乗員仲間でいろいろささやかれている片桐機長の処遇に付いてであつた。

副部長の一人は、最近、成田 モスクワ線で片桐機長のフライトチェックを担当したY機長だつた。このフライトチェックの際、片桐機長が「乗員の命」ともいわれるフライトバックをホテルに置き忘れたことなど彼は披露した。

また、通常は、よほどのことが無いが

ぎり乗員はキャンセルしない「フライト
チェック」だが、片桐機長は体調が悪い、
の一言でキャンセルしたことなど、当時
仲間内で取りざたされていた同機長の奇
異な行動も披露されたのである。

結局この会議で「明日、夕方に出発す
る福岡行きの片桐機長のフライトに同乗
し、機長の機内の様子をモニターするよ
うに」と彼は命じられたのである。

また同機長の「技能チェック」につい
ては、M機長が福岡から帰った翌日の羽
田 札幌便で行うことが決められた。

当時、彼は航空機関士としての職務の
他に、国内線運行乗員訓練部教官を兼ね

ここにちは・ひとごと

山之内 照雄

皆さまとグラスを傾け、楽しく過

ごしたいと思えます。

東京都小平市仲町241-16

(整形外科)

ていた。それゆえ、運航乗員の職場復帰
訓練の一環ということで、片桐機長の復
帰チェック」を引き受けることになった
のである。

夕闇の中で明るく照らし出された飛行
機の走行を示す灯の間を、DC 8はキ
ーンという金属音をたてて地上を離れた。
夜七時に羽田空港を出発したDC 8は
順調に、さらにエンジン音高くなって上昇
をつづけた。コクピットでは、機長が右
側、左側には副機長が座り、機長の後ろ
に航空機関士の彼が座っていた。

東京の夜空の間を機体は急角度に
上昇しつづけた。そして、高度六千フィ
ートに達して左に大きく旋回した。その
時だった。

突然、機長が操縦桿を前に倒したので
ある。飛行機は上向きの状態から急角度
で下向きに頭を突っ込んだ。上昇から急
に下降に転じたその動きに、彼は危険を
感じ、瞬間この飛行機は墜落すると思っ

た。長年乗務してきた彼だが、これほど
恐ろしい思いをしたことは一度もなかつ
た、と彼は語った。あたかも急角度に落
下する遊園地のジェットコースターのこ
とく奈落の底に落ち込んで行くように思
われたのだった。

彼は、大声で「ウイングレベル、ウイ
ングレベルにするんだ」と叫んだ。ウイ
ングレベルとは、飛行機の機体を地平に
平行に位置させることである。

叫びながら彼は前に座っている機長に
目をやると、なんと操縦桿を握ったまま
放心状態のようだった。すぐ目の前には
夜空に明るく輝く東京タワーが迫ってき
ていた。

彼の大声に機長はようやく、我に帰っ
たのが、操縦桿を手前にひき、機体はや
つとウイングレベルにもどった。東京タ
ワーへの衝突は危うく回避でき、墜落の
大惨事を免れたのである。その後は、通
常の操縦が行われて飛行機は午後九時に
福岡空港に無事着地した。

にわか画伯のスケッチ旅行

スイスの若い女性にも

ユングフラウ

オバア？ お婆？

隅坂修身

関西空港の帰国ゲイトを出て
すぐ、重い旅行カバンを自宅へ
宅急便で送るために、しゃがんで
チェックしていた。その我が
輩の頭上より「オバア」と声を
かけられたものだから、びっく
りした。「お爺」なら理解できる
が、それに、この顔には一週間
分の無精ヒゲもあり、女性と間違っ
つはない。しかし、「うちの女房にや
ヒゲがある」と歌われた歌もあり、
若者が知らない程だから、「うちのお婆にや
ヒゲがある」になっているかもしれ
ない。「お婆」と返す。

これに対し「オバア」とくる声の先は、
隊列を組んで通り過ぎる、制服姿の肌
白くて鼻の高い人達からだ。その予想が

当たったことがよほど嬉しかったのが
ウインクしたり、手を振りながら「オ
バア」と去って行った。



④スイスのユング
フラウたち ⑥世
界最高峰のポスト
ユングフラウヨッ
ホより投函したハ
ガキのスタンプに
3,454mとあった



フランス航空の乗務員であったが、一件
落着

実は、乗客の寝静まった前夜、我が輩
は、手持ち無沙
汰で退屈そうに
しているスチュ
ワーデスの慰問
をして、そこに
戻合わせた男女
の乗務員をモデ
ルにして描いた。
絵の色付けに、

赤ワインとチョコレートを使い、ポラロ
イド（日本製の小さなのが珍しいらしい）
で絵の所望差をかわしたことが、彼等の印
象に残ったに違いない。目聡く見付けて、
声を掛けてくれたのだ。

さてよ、先程の「オバア」にはフラン
ス語訛があった。それに男であろうが、
若い女性であろうが構わず、別れに「オ
バア」と言つのはフランス語を話す人達
である。すると、先程の男女の一行は

ところで、このエアフランスに搭乗
したのは、スイス旅行の帰りであった。
南スイスには、アルプスで最も完成され
た名峰といわれるマッターホルン、それ
にアイガー、メンヒそしてユングフラウ

などが連なる。

マッターホルンが昔は、「魔の山」と恐れられ、誰ひとり登らうとしなかったらしい。その谷の奥の、自給自足の寒村にすぎなかったツェルマットも、1865年にイギリスのエドワード・ウィンパーの初登頂で、両者は有名になった。今では、スイスでも人気ナンバーワンを争うほどである。その山の形は、正に矛先そのもの。これは、なを突き刺し空に向かつて現れたか？ 天候に恵まれ山はよく見え、その矛先を凝視しながら歩く。

ヨーロッパで一番標高の高い鉄道駅(3454m)ユングフラウヨッホ駅より氷河に出て、ひとりていどぶらぶらしてみると、結構賑やかだ。しかし、我が輩以外に、絵を描いている物好きな人間は見付からず、8月初旬といつのに、雪まで降って水をさす。

スイスには山だけではなく、18世紀より時計が止まってしまったような村、ソリオがあつて二日間、イタリアから再入

国してでも描く価値はあつた。入国には再が付くのに、時間や人生には再が無いよつた。

例えあつたら、貴方なら……

(鳥取県西部医師会報 No.148から)



スイスの国旗は赤地に白十字 ツェルマットの風景は

古代エジプトのオベリスクを思わせる神秘的で魅惑的な山である。村人には永らく「魔の山」と恐れられ、誰ひとり登らうとはしなかったらしい。アルプスの登山史上、最高峰のモンブラン登頂に遅れることはほぼ80年、登頂不可能と思われていた山も、1865年に遂に成功した。医学乃野でも、それまでに出来なかつた遺伝子解析など多くのことが、今では可能となつている。

また、ここに見える支柱にネズミ返しのある穀物小屋の、ネズミの被害を未然に防ぐという思想は、医療分野でも言わずもがなである。

我々が現状に安住してしまつのは怠慢か、広い未知の世界に、「赤ひげ」の目線で飽くなき探求をしていけば、新たな難問も見えてくるが、未来も開けていくであろう。

(鳥整会誌 第24号 平成20年12月
表紙絵の言葉から)

『迷える子羊』
マッターホルン(4478m)は南スイスに位置しアルプスで最も美しく

神学博士から大変換

医師シユヴァイツァーの献身

海老沢 功

シユヴァイツァー博士は熱帯アフリカで、現代医療に恵まれない現地人を対象に医療活動を行い、一九五三年ノーベル平和賞を受けたことは、良く知られている。彼はまず哲学と神学の文科系の学問を修め、趣味として高校生の頃からオルガン演奏を学び、大学在学中はフランスで著名なパイプオルガンの奏者ウイドー教授について勉強した。

彼は牧師としてだけでなく、パイプオルガン奏者としても十分に生活できる程に生長していた。事実、彼がヨーロッパ各地で行ったオルガン演奏回数は、全生涯で計四八〇回に及んでいる。

その彼が三十歳を過ぎてから、医師になる決心をしたため、まず理科系教養課程二年と医学部の四年、計七年かけて三十七歳で卒業したことは、あまり知られ

ていない。

彼は現在フランス領となっている旧ドイツ領アルザス地方のギュンスハッハで、牧師の長男として生まれた。そのため、哲学と神学を学び、神学博士の称号と、牧師になる資格を獲得した。その彼が聖書に出てくる乞食ラザロの物語を引用して、大変換を決心するに至った。裕福で何一つ不足するものがない金持ちの家の前の道端に、乞食のラザロが居て、あの金持ちの食卓から落ちこぼれたパン屑でも良いから、恵んで欲しいと願っていたという話である。

これは現代医療に恵まれた自分達ヨーロッパ人を金持ちに例えると、現代医療に恵まれないアフリカ人は乞食のラザロである。熱帯アフリカの医療事情は現地で活躍している言教師から、牧師である父の所に届いた書簡を見て彼に知らされた。アフリカ人に多いヘルニアに罹患すると、ヨーロッパであれば外科手術により容易に治療できるが、熱帯アフリカで

は腸閉塞を起こし、腹痛に悩んで死を待つより他はない。

そこで彼はフランス系の言教師がいる熱帯アフリカ、赤道直下のガボンに行き、医療活動をしよつと決心した。この旨を大学の医学部長に告げたところ、すでに神学博士の称号を持ち、牧師としても、オルガン奏者としても十分に生活できる彼が、医学部に入りたいと言いつ出した。そこで医学部長は、シユヴァイツァーの頭がおかしいのではと思ひ、精神科の教授に相談したことが、後日明らかになれた。

彼が医学部の全課程を終了するには、計七年かかる。彼はすでに三十歳に達しており、七年間の生活費も稼がなければならぬ。また彼の婚約者は著名なユダヤ人の歴史学者フレスラウ教授の娘であり、ヘブライ語を含む七カ国語をマスターした才媛である。彼女に彼の意向を告げたところ、彼女はそれでは自分は看護婦の学校に入りその資格をとるから、一

緒にアフリカにつれて行ってくれと申し出た。

後に両者は結婚したが、結局彼は規定に従い、教養部と医学本科の計七年を経て医学部を卒業、その後バスツール研究所に通つて、熱帯医学を学んでアフリカに旅立つた。彼の妻は、シュヴァイツァーがアフリカで医療活動を行うのに必要な医薬品、手術器具など一切の調達をした。

彼らはフランスのポルドーから赤道直下のガボンに向けて出航したが、船中で熱帯地方滞在歴の長い医師に遭遇し、熱帯医学の実際について、かなり深く学ぶ機会があったと述べている。現地のフランス領植民地ガボンのランバレネに到着してみると、住居は椰子の葉で葺いた粗末なもので、電気さえない環境であった。飲料水は雨水を濾過したものである。

患者は医師がいるという情報を耳たよりに数十kmを徒歩で来たり、なかには家族全員をつれて来る者があるので、彼等

の宿舎まで造つてやらねばならない環境にあった。

やつと仕事が軌道にのり始めたとき、第一次世界大戦が始まった。彼の国籍が敵国のドイツであるため、捕虜収容所に入れられ、はじめはアフリカで、ついでフランス本国に送還された。

そして途中でアメーバ赤痢に罹患、これは手持ちのエメチンで抑えたが、南フランスのプロバンス地方に移動されてから、微熱がでるようになつた。後日自國に送還されてから右上腹部の疼痛を覚えるようになり、自らアメーバ性肝膿瘍と診断した。

そのため、自宅から最寄りの駅コルマールまで、約一六kmの道を妊娠中の夫人に付き添われて徒歩で行き、そこからシュトラスブルクの大病院に行き、緊急開腹手術を受けた。一回の手術で完治せず再手術を受けている。これにより完全に回復し、第一次世界大戦が終わると、まもなくアフリカに再出発して医療活動を

はじめた。

彼はアフリカでは一般内科的診療の他に外科手術も担当したが、アフリカ睡眠病など、現在でも満足な治療薬がない患者に接しては、ただ自然の経過をみるだけしか方法がなく、現代医療の無力さを痛感したと述べている。

彼はノーベル平和賞で受領した賞金で現診療所の他に、オゴウエ河の対岸に敷地を購入、病棟の建設に取り組んだ。

第二次世界大戦後、医学会総会が東大医学部精神科の内村教授の主催の下に開催された。その時内村教授がシュヴァイツァーを招請したが、遠路のため出席を断わられた。彼は飛行機が嫌いであつたと言つた。シュヴァイツァー病院内には小さな図書館があり、そこには同病院で働いたことのある野村実博士の著作など、日本語の本が多数並んでいる。

《引用文献》 海老沢功著『素顔のシュヴァイツァー』近代文芸社（東京）

開業ABC XI

中村雄彦

書評 田辺 功著 「心の病は脳の傷 うつ病 統合失調症 認知症が治る」

2008年12月に出たこの著書は、2009年1月現在、既に重版を数え、Amazonの本の総売上ランキングで11位と驚異的な売れ行きで、私などが今更申し上げるまでもないのだが、著者からわざわざ贈呈され、一読してあまりにも内容が素晴らしいので秀筆を振るわせていただくことにした。

著者田辺功氏は東大工学部航空学科卒で、長らく朝日新聞の医学・医療担当の記者として活躍され、現在はフリーの医療ジャーナリストとして医学、医療を多方面にわたって学識豊かな歯切れのよい極めて適切な解説で、多くの読者を有する方である。

既に「漢方薬は効くか」、「ドキメン ト医療危機」、お医者さんも知らない治療法教えます」、「40才からの頭の健康診断」、「脳ドック」など20冊を超える著書があり、一作ごとに名声をあげられている著名な方でもある。

本書は放射線科医の東北大学名誉教授松澤大樹博士の話や聞くとなっている。筆者の田辺氏が松澤博士の論文や直接の話を詳細に砕いて正確かつ、大変にわかりやすくまとめたもので、医師は勿論素人の方が読んで明快感で実に面白く、一気に読ませる好著である。

松澤博士は統合失調症の患者は必ずうつ病を合併していることに着目し「混合型精神病」という病名をつけた。そして認知症は脳の萎縮とは無関係とし、またアルツハイマー病のアミロイド説は誤りで、多数の患者の脳のMRIの画像からアルツハイマー病は脳の扁桃体の傷と同時記憶中枢の海馬の萎縮によると結論した。

治療としてはセロトニンの重要性を説き、バナナをはじめアミノ酸のトリプトファンを多く含む赤みの魚、大豆などを多く摂取し運動をすることを勧めた。

著者田辺氏の述べるように、松澤博士の業績は従来の定説を覆すものでノーベル賞級のものである。

田辺氏は大変な勉強家で、新刊の医学雑誌の論文のほとんどを読みこなしておられ、「医療にもつと科学を」と常に心がけられ、これまでも社会常識や学会、学界の常識とかけ離れたことも出来るだけ取材し、ユニークな記事を書いてこられた。従来の大新聞が載せにくかった記事もあつたと思われる。特に「非科学の最たるものは精神病」とおっしゃる。「従来の非科学的で不可解な精神医療はいずれ一変されるべきで、松澤博士の発見はそのきっかけになる」と書いておられる。田辺氏のいわれる様に、今までの定説をひっくり返す、あるいは全くいわれていなかった未知の疾患が認められるのは容

易ではない。

私事だが、田辺氏によって朝日新聞全国版に掲載していただいた私がドイツ語で書いた世界初の疾患に「シイタケ皮膚炎」があり、英文で「タバコ耕作者の皮膚炎」がある。特に今では海外での発表例も数多くみられ、昨年出版された講談社の「皮膚科診療力ラーアトラス大系全8巻」に私自身が執筆した「シイタケ皮膚炎」は、現在のように広く知られるまでには発表してから30年かかっている。横並び、エビデンス中心で安全第一の学界では新しいことが認められるのは難しい。私は上記疾患を含めて10件ほど日本初の疾患・事項をこれまで発表し、認められてきた。

こうした新しい事項は田辺氏から「我々のいうスクープです」といわれ、「何か新しいことはないですか」と、これまでしょっちゅういわれてきた。本書が素晴らしいのは松澤博士の卓越した業績によることは当然だが、田辺氏のしつ

かりとした基礎のある学問にもとづいた飽くことのない新しいことを追うての執拗な探究心の結果である。繰り返すが本書はその意味で、正に貴重な一書である。松澤博士の貴重な御研究の益々の発展をお願いするとともに、著者田辺氏のこれ



軽井沢万平ホテルで（昭和47年）

からの益々の御健筆の冴えを切に期待する。

表紙の言葉

村上 泰

（京都市北区）

「ボケ」

蕾の美しいボケは、平安の昔から地植や分栽として多くの人々に愛でられてきた。

花言葉を調べると、「先駆者」、「熱情」、「妖精の輝き」、「平凡」とある。

3月中旬、春の花々に先駆けて小豆つばのようにかわいらしい蕾をつけると、それらがみるまに膨らんで開きかけた美しさは、まさに妖精の輝きと言えよう。

我が家のボケは、今年も沢山の蕾をつけた。魅せられて思わずシャッターをきったのだが、作品は花言葉通り「平凡」になってしまった。

（第38回日本医家写真展出品作）

温泉街での野球の素振り

市田 隆文

勤め帰りの夜、温泉街を回って帰る道すがら、ふと旅館の前でどこかの野球部員十数名、バットの素振りを行っているのが目に留った。夕食を終え、就寝前に気合いを入れて、明日の試合のためにバットの素振りを大勢で声を掛け合ったりして、あるいは黙々と反首でもするかのようにバットを振っている。30年前とちつとも変わっていない。ほほ笑ましく、そして少し昔を思い出させる情景であった。

医学部の運動部活員が一番憧れる大会が東医体（東日本医科大学学生体育大会）である。今も東医体、西医体、全医体といひ合い、学生が実力争いをすると、「何部で運動しているのかい」として、「東医体ではどこまでいった?」、「優勝は何回ある?」、「どこをよく尋ねる。また、学会、研究会

で知り合った医師、研究者との懇談でスポーツ、部活（ぶかつ）はなんだい?」、「東医体でどこまで勝ち進んだ?」、「え、あの時、札幌の大会に出ていたの?」など、突然数十年来の旧知のように話が盛り上がる人が多い。

先日、ある整形外科の集まりで、専門外の知識を得たいとのことで肝炎の講演を行った。その後の懇親会で、あつまりの中心の整形外科の教授とじつに30年以上前に準硬式野球で対戦していたことが分かった。一瞬にして、30年前の状況が脳裏に蘇った。あの時のあの打球、スコアまで記憶が蘇り、さらにその教授が在籍していた東京大学が新潟まで遠征にきて、前日の宴会と翌日対戦したことも、鮮明に思い出し、話は止まることを忘れてしまったかのようであった。同時に懐かしい名前がどんどん出てきて、あたたかも野球部OB会の様相を呈してしまつた。

また、弘前大学に決勝で完封した記事

が群馬大学医学部主催の東医体新聞に載っていたのを思い出し、弘前大学主催の特別講演でその記事とスコアを講演最初のスライドで披露した。あとの懇親会で大いに受けた記憶も新しい。

さて、バットの素振りであるが、それは昭和46年の夏の東医体でのことである。前年度の札幌で初優勝したわれわれ新潟大学医学部は勇躍、仙台の地に乗り込んだ。勿論、二運覇を目指してである。緊張して乗り込んだ宿舍が大きな和風旅館であった。ふと、同宿の人たちを眺めると、それは大相撲の一向で、当時の大関前の山を筆頭に、高見山など総勢20、30名が同じ旅館に逗留していた。高見山が歩いていると、それは背中に針を立てた山が歩いているようで、あつけに取られんばかりの大きさであった。

ある時、風呂場に入ると、前の山を頂点にすれば、一番下の相撲取りといつか、お弟子さんが大きな白パンツを脱いで入ってきた。年の頃は、われわれ学生

より若く、本当に可愛い顔をした若者であつた。かれにとつて風呂場は、上下関係で大変な相撲社会で一番ほつとする時なのか、かわいい顔でお風呂に入つてきた。そして、おもむろに凍つて硬くなつていたアイスクリームを湯船で少し溶かして、美味しそつに食べ始めた情景が未だに思い出される。大きなからだだが、湯船に浸かり、小さなアイスクリームをお湯で周りを少しづつ溶かしながら、小さなスプーンで食べている姿は微笑ましく

こんなには・ひとこと

海老沢 功

世界的に有名な東大眼科教授石原忍先生の書「好學楽道」の色紙を先輩に見せてもらい、その複写を額に納め毎日眺めている。専門の医学の他に何か趣味を持つてという意味が。東京都世田谷区東玉川1-19-7

(内科・熱帯病)

もあり、「頑張つてくれ」と励ましたくなつた。僕たちは夕食後、明日の相手の分析を中心にしてミーティングを行い、その後、必ず各自バットを持って宿舎前で素振りをするのが日課となつていた。掛け声を合せて、20本、50本、100本と素振りを行い、その後入浴して、就寝するのが決まりであつた。そんな折相撲の中堅若者が出てきて、「ちよつと貸してみな」と声を掛けてきた。バットをぶんぶん振りながら、「それほど重くないな」「あんたたち、どこから来たのかね」などどひと時の和気あいあいのムードが心地よかつた。

敵しい上下関係のある社会であることは知つてはいるつもりであつたが、どこもなく若い衆とこんなことをして、上の大関あたりには叱られるのではないかと思つて、躊躇しながら話し合つていた。そんな時に大関前の山も出てきた。一瞬の緊張感があつたが、俺にもちよつと貸

してみな」と言つて、軽々とバット数回振り、「軽いね」と言つたのを見て、周り全員顔が弛んだのを覚えている。バットが腕より細かつたのも鮮明に覚えている。

何気ない旅館前の野球部員の夜の素振り風景が今の世の中になつても変わらないことに、なんだかほつとするとともに、一瞬にして30年以上も前の情景を思い出させてくれた、嬉しいひと時であつた。

その東医体では、僕はピッチャーで2勝挙げ、クリーアップを打つて、もちろん優勝、連覇した。決勝は前年度、われわれに3連覇を阻止された北海道大学が相手で、最終回に逆転サヨナラ勝ちで2連覇を果たした。あまりに嬉しくて、その夜、仙台の西公園の伊達政宗公の前の噴水池で、裸になり大騒ぎをして、危うく警察沙汰になりそうになつたのは、今でもわが野球部の語り草にもなつていて、何年たつても野球からなかなか縁が切

れない。整形外科学会、脳外科学会が、年に一回の学会総会の後に懇親の野球大会を楽しそうに行っているのを聞いていた。とある日本肝臓学会の演題選定委員会で会長が、一つ学会の目玉が欲しいと懇親の席で意見を聞いた。即座に「学問以外で野球東西対抗を行うのが宜しい」と冗談交じりに提案したのが少しお酒の入ったわれわれであった。

八年前から日本肝臓学会では年に一回秋の肝臓学会大会に合わせて東西対抗野球を行っている。その言い出しっぺが僕ともう一人東芝病院の三代俊治研究所長で、彼は最初に述べた東大鉄門会、野球部の出身で、新潟遠征時とその年の東医体で対戦している間柄である。この年になってもまだ野球をやっているのは、これら青春の思い出が身体に沁みついているのかもしれない。

そして最近、団塊世代に野球少年だった人が多いのにあらためて気が付くことが多くなってきたのが、はたまた面白

い。

「完 いやいや肝で候」

ナウマンゾウへ惟いは

駆巡る

秋元光博

本州最北端の尻屋崎は石灰岩の山として知られ、太平洋戦争前から、石灰岩の採掘によって、今から万を数える時代の哺乳動物であるナウマンゾウ、トラ、オオソシカなどが知られている。

出土場所は太平洋側の尻労地域と津軽海峡に面したムシリ島の対岸一帯からだが、平成十五年には慶應義塾大学文学部民俗学・考古学研究室（阿部祥人教授）が尻労の安部洞窟の発掘調査を行っている。

なにせ石灰岩の礫のため発掘は難渋したようだ、第一層から小動物の骨片、第二層から石刃が検出されており、平成

十六年にはより深い層（下層）から動物や人骨が一緒に出土するのではないかと期待されたのである。いづなればナウマンゾウが生息していた時代に人間が存在していたかどうか、ということなのである。

本州最北端の下北半島では、にぎやかな水泳の季節が過ぎて、北斗七星が寒空に輝く頃になると、流木が海辺に押し寄せてくる。これを風呂やストーブの薪にする風習は今でも随所に見られる。しかし細かい槽拙は近辺で焼くしかない。

この灰色の槽拙は、力尽きて死んだ渡り鳥の骨であると信じ、一夜、漁民はこぞってこれを焼いて渡り鳥の安全を祈るという。神酒を温め、肴を供えてみんなが火を囲む。卵を温めて孵そつとした人も居たかも知れない。

科学的、論理的でない批判するより、厳しい自然をたくましく生き抜いてきた北方漁民の心の優しさに素直に感動し、

称賛し、こんな風習の下北半島を訪ね
それぞれの風土、歴史、民話に触れ、そ
の底にある歴史的背景に惟いを馳せるこ
とは、誠に楽しいといつのが実感である。

潮時を心得ている枯れすすぎ

寂しくて人は焚き火の輪に入る

除夜の鐘わが身を裁く音ならむ

「ニッポニウム」「ウラン」

惟いを馳せる

酸素や窒素などの元素の仲間には、ア

「ニッポニウム」

新谷 周二

今回、大学の同級生の津谷先生の
ご紹介で人会させていただきました。
茨城県南部の救急基幹病院ですが、
昨年7月に院長になったばかりです。
よろしくお願ひします。

茨城県取手市本郷2-1-1

(神経内科)

メリシウムアメリカ、フランシウムフ
ランス)などの国名がついたものもある
が、かつて「ニッポニウム」という名前
の元素も存在した。後に第四代東北大学
総長となった小川正孝が一九〇四年から
のヨーロッパ留学中に、日本人としては
じめて新元素を発見した。しかし、追試
験での確認で、一度は元素表に採用され
たニッポニウムの名が姿をけしてしまっ
た。

ところが、小川の発見から焼く九〇年
後、新たな事実が判明した。小川は新元
素を当時未発見だった元素表の43番に
該当する元素として発表したが、実は現
在レニウムと名づけられている75番元
素だったことが分かったのだ。

ニッポニウムの発見時点では、まだ75
番元素は未発見であったので、ニッポニ
ウムの名が構成まで残るチャンスは大い
にあったわけで、残念なことであったと
惟う。

ところで、小川がニッポニウムを発見

した研究室には、ドイツのオットー・ハ
ーンという科学者も滞在していた。後に
92番元素のウランが核分裂することを
発見し、ノーベル化学賞を受賞する人物
である。

ウランは一七八九年に発見され、二十世
紀にはその研究と利用が一気に進んだ。
一九〇五年にはアインシュタインが、核
分裂前後の物質の差すべてがエネルギー
に変わるといふ理論を発表し、一九三八
年にオットー・ハーンがこの核分裂を確
かめ、一九四二年にはイタリアの物理学
者エンリコ・フェルミが世界初の原子炉
の運転に成功したのです。

原子力発電は、こつした著名な科学者
のほか、多くの先人たちが長年にわたり
力を合わせるることによって誕生したのだ。
ちなみに日本では、一九六三年の十月二
十六日に初めて原子力による発電に成功
し、この日は「原子力の日」と定められ
ている。

詩吟の本より

大黒 勇

平成元年五月四日 第七十八回文京區
吟劍詩舞道大會にて、吟道館流白吟詠
會員として、荊妻が四人合吟の一員とし
て出演した時の詩が赤馬ヶ關と題する詩
であつた。そこで吟道館流の教本を取出
して見た。いつかも述べた様に、今はそ
のまま日本流に吟し得る様に流し書きに
なつて居るので、次の如く復文してみた。

長風波浪一帆遠 碧海遙回赤馬關

二十六灘欲行盡 天邊始見鎮西山

平起式十五刪韻

氣になるのは轉句下二字が孤平になつて
居る事である。然しここは許される所で、
但規則は、その場合上二字は平平とすべ
きをこれは平仄になつて居る。されど起
承結の三句は正規のままである。

作者は靈雨伊形質。肥後の詩人で熊本
の學館に學び學師になつた田。広辞苑に
よれば赤間關(又は赤馬關)は下關の古
稱。鎮西は九州防衛の爲大宰府に在つた
鎮西府、即ち九州は作者の故郷。三十六
は多くのので意で瀬戸内海の早瀬の意。
次の一篇は先考が時々吟じて起句の
みが今も耳に残つて居るので、採上げて
みる。

曉行 蒙齋月田右門

残月滴露濕人袂 曉風吹鬢覺秋冷

忽驚大蛇當道橫 拔劍欲斬老松影

(仄で押韻)

作者は肥後熊本藩の儒者なりと。大蛇
は幕府を指す。徳川は松平姓なので老松
に譬へたのである。要するに倒幕運動の
容易には涉らぬのを歎いた詩なりと。

平仄を檢するに日本語ではヘイ、レイ、
エイと同韻に見えるが、承句と結句の七
字目は上聲二十三梗韻で仄韻であり、筆

者は仄韻詩に就いては全く知らないから
敢て觸れない。ついでに述べれば起句の
袂は音ヘイで去聲八韻韻。
次は菊水流三千周年記念公演に、荊妻
が群舞の一員として演じた春嶽松平慶永
の偶成を採上げよう。

眼見年年開化新 研才磨智競謀身

飄然習俗流浮薄 能守忠誠有幾人

仄起式十一眞韻

研はみがくが平、すずりが仄、磨はみ
がくが平、いしうすが仄、知は平だが智
は仄。

次に荊妻がよく練習して居た劉禹錫の
竹枝詩を載せる。

山桃花紅滿上頭 蜀江春水拍山流

花紅易謝似郎意 水流無限似儂愁

平起式十一尤韻

花は散り易い、男心の移り易いのに似
私の愁は盡きないの意。

悲喜こもごも生涯

青山 六 弥

日露戦争が終わって十五年後の大正九年（一九二〇）、私は農家の六男として生まれた。母四十五歳、母乳はあがり、コンデンスミルクの缶が戸棚に多く積まれていたのを覚えているから四、五歳までは飲んでいたと思われる。昭和二年、わが家に電燈が点いた。その明るさに驚嘆した。それまでは石油ランプで火屋がすぐ黒すみ、毎夕、掃除するのが役目だった。

小学生時代は、一生を通して最も自由で、元氣潑刺、痛快な時で、夏は沢蟹とり、秋には山葡萄やあけびとり、冬は手製の竹スキーで楽しんだ。雪が深く（福島県阿武隈山地）町の学校まで三kmの通学は大変だったが、父兄数人が先導してくれて助かった。六年生の時、学芸会で模擬国会をやリ、総理大臣を演じ、演説

が音吐朗々と上出来だったと褒められ嬉しかった。議長のとけひげが落ち、付け直したら又ホロリで大爆笑。演出の渡辺先生は絵が得意で、ヤレバ出来ルと言うのがモットーであった。

中学校は三春町にあり、汽車通学で最寄の丁駅まで三km程で、冬が難儀だったので、一年生の冬期だけ下宿をしたが、五年間無欠席であった。中三の時、父が食道癌で亡くなった（享年六十四歳）。当方には一大ショックで、依怙地になり、農作業（特に夜の）を嫌がり、家督を継いだ兄と不仲となり、五年生の修学旅行には参加できなかった。費用のことで争った為で心の傷として長く残った悲しい思い出の一つである。

一年生の三学期に教頭による英語の課外授業があり、イソップ寓話、ロビンソン漂流記など発音を重視した教えを受けたが、今でもかなり暗誦している程、力が付いたことは確かだった。後年、先生は奈良の畝傍中学校長を最後に退官され

た。実はこの渡部乙彦先生の娘が、今は亡き妻稀代子で、仲人はかつて五年生担任の工先生であった。

中卒後、紆余曲折はあったが、兄嫁の叔父に当たる開業医、青山重一郎の養子にきまり、昭和十四年、昭和医専に入学した。大戦前の緊迫した情勢の中、皆、真剣に勉強した事は確かで、授業を欠席する者は極めて少なかった。解剖学実習は後で東大教授となられた人類（骨）学の大家、鈴木尚先生指導で、筆者が下肢筋のスケッチをしていたのを見て、「よく描けているね」と声をかけられた事があった。また課外授業でドイツ語を習っていたのが縁で、ドイツ大使館（オットー大使）の音楽会に招待され、大使夫人らと「モーツアルトの夕べ」を楽しんだ事もあった。

二年の時、母が亡くなったが帰郷しなかった。家事一切よく出来た立派な母であった。卒業後は短期現役軍医となり、昭和十八年一月十日、満州の東方、ソ連

国境に近い虎林の師団司令部付きとして赴任した。同行のY君と一緒に心強かった。終戦直前は安東市近くの歩兵部隊付きで、ソ連軍の武装解除を受けた後、貨車に乗せられ一ヶ月もかかってソ満国境を越え、バイカル湖の南二百km程のラインゴール收容所に到達した。それから三年の抑留記は本誌に発表済みなので割愛させて戴く。

復員船はあの日本海大海戦で「敵艦見ゆ」の発信をした信濃丸、これが最後の「ご奉公」の事だった。昭和二十二年八月三十日、舞鶴で復員となり、翌日故郷常葉町に帰って養母をはじめ親族と会ったが、長兄、養父重一郎、義弟、義妹が亡くなっていた。養父は昭和十九年十一月二十七日に鬼籍に、肺炎だった。奇しくもわが医師免許証交付月日は同じ二年前である。

肝腎の医院は東京より来られたり医師が診療をされていた。すぐ交代とは行かず、当方は郡山市の太田病院内科に勤務

させて戴く事になり、もう少し研修を続けたいと思っていた矢先、二年で帰り開業する破目になった。まだ健保が制度化されていなかったたので、八年間で多くの未収金があり心底から嫌になった。実子孝が大学卒業後三年経ったので、昭和十二年四月、交代する事がきまり、再び太田病院に復職させて貰う事が出来、満足した。

昭和二十五年に前述の稀代子と結婚し、一姫二太郎と子供に恵まれ、精一杯働いた。当時肺結核が多く、熊谷茂蔵（元東北大総長）博士が来られ、個々の実例多数に就いて懇切な指導を戴いた。一部県の学術大会で症例報告もした。病院の外來患者が多く、一日千五百人程で、内科外来診療が午後三時までであった事もあった。自衛隊の診療援助をしたり、学校検診も多かった。

また同僚六人とグルタチオンの解毒に関する動物実験を、昭和医大薬理学角尾教授指導で、診療終了後の夜、十一時頃

まで二年間続けたが、マウス及び鶏卵鶏胎子)の管理も難しかった。論文完了まで三年余を要した。学会発表後揃って学位が授与された。

昭和四十一年には世界一周の旅を、同僚と二人で病院視察の名目で楽しんだ。夜の診療依頼なく安眠が出来、生涯で一番楽しかった二千三百日であった。昭和四十八年、付属鶴川病院院長を命ぜられ赴任、町田市民となった。第一次救急病院の指定(月一回位、休日の内科、小児科)を受け、当日は多忙を極めたが軽症が八割で、また重症で当方では無理な患者を近くの北里病院まで救急車に同乗し搬送した事も数回あった。医師不足で当直を週二回近くした。

昭和六十三年には妻稀代子を膀胱癌で亡くした(享年六十二歳)。三年後院長を辞任、東京都医、特老ホームの非常勤を二年、平成十八年三月を以って医業から退いた。プール通いや絵を描く時間が多く満足していたが、平成十九年一月に第

一腰椎の圧迫骨折をした。入院の適応でないとの診断で車で通院。三ヶ月後にはプールにも行き、今に至ったが脊椎前彎で長い歩行は不能そこで一大決心をしこの一月、自動車運転免許更新を果たせた事は、今後の生活の幅を向上出来る画期的な快挙と喜んだ。

夜間は運転しない、駐車が楽に出来ない店などには行かない。町田市民プールまで9km、楽に行け駐車場係りも親切泳ぎ仲間は十人余り、休み時間の世間話

「こんにちは・ひつじ」

おお 大 坪 公 子
おほ じほ ぎみ こ

松木耀子先生のおすすめでお入会させていただく事になりました。楽しく豊かな気持ちにさせてくれる声楽は大好きです。皆様と楽しくすごさせていただきたいと思えます。

東京都世田谷区三軒茶屋1-21-5

(内科)

はこの上なく楽しく笑いが絶えず最高の癒しだ。水中歩行二十分、クロール、背泳混せ五十mをゆっくり二百mを完泳するのがノルマ。月一回二十五日に「ニコニコ会」の名で茶話会を会館食堂で催し、話題は政治や社会の動向、野球の話等いつも盛り上がる。

元教師、技師、歯科医、元会社員等の他、主婦一人で年齢は小生を除き65〜79歳まで、異色は斉藤精神病院の調理を担当された方(主婦)で、宗吉(北杜夫)先生の外来患者が多いとか、茂吉先生の命日の昭和二十八年二月二十五日には、関係者一同揃って鰻を食べる習慣が続いているなど、興味深い話題を少しずつ話される。先日、茂太先生の著書『茂吉とその周辺』他一冊を借用した。プールでは皆さんがこの老人を大切にして下さるので感謝に堪えない。今、食事は朝食が自炊、夕食のみ二階の長男夫婦孫と一緒にしている。消化の良いもの少量、蛋白質は卵、魚、肉は十分(一日50g魚三)

採る様にし、風呂の掃除、洗濯など小まめに体を動かし、プール行きのない日はカートを用い三十分近く散歩する。プール行きは月十回位、いつまで続けられるかが課題、無理をしない心算でいる。

いま、過ぎ来し方を省みると正に波乱の一生と言える。最も濃密な時間は、鶴川病院勤務の十九年であった。苦いカルテもあるが、若い半身不随の患者を寄生虫(アスペルギルス)に由る脳栓塞と疑い北里病院で確認され三ヶ月で治癒した例もある。また東大医師会主催の臨床医学研究会(春秋会)に約十五年間にわたり延べ数十日通った事は大変診療に役立つた。多忙の中、日曜日にアサヒカルチャー教室で油絵を学び画友が出来た事も楽しい思い出であるが院長在任中、最大の援助者とも言える妻を失った事は最大の衝撃で、仕事に精を出すのが困難となつて了った事が悔やまれる。来年は九寿一日一日を楽しく明るく過ごすよつ努めたい。

「療養型病院」と「終末期

医療」とのかかわり

浜名 新

厚生労働省の「終末期医療の決定プロセスに関するガイドライン」（平成19年5月）には、「延命治療の開始・中止・変更などについて患者の自己決定を原則とする」、「医師の独断を避けるため複数の医療従事者によるチームでチェックし医学的妥当性、適正を判断する」、「患者本人の意思確認ができないとき家族と相談する」などが記述されている。

臨床現場で最も関心のある事項、「どのようなケースで「刑事責任」に問われるか」といった「臨床基準」は示されていない。

日本救急医学会は平成19年10月「人工呼吸器の取り外しを選択肢の一つとする」指針を決めた。また、日本医科大学では、「人工呼吸器を外すのは、個別ケー

スことに倫理委員会で判断する」という独自の指針で運用を開始。

終末期医療における「延命治療中止あるいは不開始」などについて、多くの病院での関心事は、生命維持装置の象徴である、人工呼吸器をとりあげている。心肺機能は換気・循環機能保持に必須であるが、「水分・栄養補給」も基本的な生体維持に必須の因子である。

江口医師は第2の人生をある「療養型病院」へ就職して数年が経つ。現在彼は「療養型病院における終末期医療との係わりあい」を、担当医として家族へ提示・理解させる努力をしている。入院時、家族と医療側（医師・薬剤師・看護師・介護士・栄養科・リハビリ科・医事課）との情報交換の場で、「終末期医療」の対応のことを説明・提案している。

『療養型病院』は、最終的には『終末期の医療』を担っておりす。

『終末期』とは、治癒不可能な病気、癌

難病）に冒されている場合、予後的には数日あるいは2、3か月の場合、慢性疾患で急性増悪を繰り返して予後不良になる場合、老化現象とか脳血管障害で数か月から数年で死を迎える場合などを包括します。これらの人たちは、その時々々の急性期の肺炎、呼吸困難などの心不全、腎不全、吐血、下血、糖尿病悪化、癌の末期などで状態不良に陥っても、医療対応で何回かは危機を脱します。だが、「寿命」の終焉が近づけば、いくら治療・対応しても、心肺機能の回復が得られず、死が避けられませんか。

終末期に直面した場合、当院の対応と処置（経管栄養、静脈からの点滴、酸素吸入、バルーン留置、気管チューブの気管内挿管？、昇圧剤？、その他の処置）による『看取り』になります。看取りの場合、ベッドサイドで「アンビューバッグを用いた人工呼吸」、「胸の外側から行う心臓マッサージ」での「簡易心肺蘇生」を行います。医学用語ではD o N o t

Resuscitate)(DNR)、つまり急性心不全に陥っても CPR (心肺蘇生) をしませんが、よろしいでしょうか……」

「終末期医療 あるいは「DNR」といわれて 聞きたくもない言葉を聴かされて 表情を曇らせる家族は多い。

平成5年に長期療養目的のための「療養病床群」が生まれ、平成12年に「介護保険制度」が発足。療養病床群は療養病床と名称を変え、医療の必要性の高い「医療保険型」と介護を重視した「介護保険型」に分けられた。平成18年医療法の改正で平成23年末に「介護保険型病床」は廃止され、療養型病床は38万床から22万床に減り、新規に「介護療養型老健」が新設される。

平成18年10月から療養型病床に適用される「医療区分3・2・1」と「ADL」を運動させた「診療報酬の点数」が決められ運用されている。

さて病院は 機能の面から、慢性期型

の「長期療養型病院」と「急性期型病院(通常の病院)」に大きく分けられる。

急性期型病院での診療報酬は「出来高払い」で、医師はできる限り治療・処置で患者を快癒、小康状態に導く。当然の対応といえる。担当医は、担当の高齢者患者の病状に対する継続治療の必要度、小康状態であるものの悪化・再発しやすい状況を見極め、最適な受け皿の病院として「療養型病院」施設として、老健・特養・有料老人ホーム・在宅など」を選択・紹介する。

一方、療養型の病院では、経営上の観点から、診療報酬の点数の高い、従って重症度の高い、治療処置を必要とする「医療区分3」と「医療区分2」の患者を積極的に入院させ、「医療区分1」の患者を敬遠する。故に、療養型病院では急性期型病院の「受け皿」として機能分担がより明確となり、治療・処置を要する患者が選別されて転院してくるので以前より繁忙度は増した。

病院であれ施設であれ、担当医師、ナース、S (言語療法士) は、患者の経口摂食について「困難」と評価すれば、患者の水分栄養補給をどうするか、大問題となる。「説明と同意」を経て、処置の方法を選択しなければならぬ。

管栄養には「経鼻胃管」、内視鏡を使い胃に穴を開けて管を挿入する「胃ろう」、開腹して造る「腸ろう」がある。一方、静脈経路として、手足の静脈、困難のとき鎖骨の下部の皮膚から鎖骨下静脈、頸部の皮膚から内頸静脈、鼠径部の総腸骨静脈へカテーテルを挿入し、「中心静脈栄養(IVH)」がある。

他方、「尊厳死」などの関連で、本人あるいは家族の要望で水分栄養補給の「延命処置」を、「中止あるいは不開始」とする場合もありうる。

最近、江口が担当した、急性期病院からの新規入院患者15症例中、実に12症例に経鼻・経胃管(PEGは8症例)の処置が、2症例に中心静脈ポートが挿入

されていた。これらの処置は代表的な延命処置で、経管栄養の普及は日本の平均寿命の延長に寄与している(男79・1歳 女85・9歳)。

療養病院内でも嚥下・咀嚼機能が低下し「経口摂食」が出来なくなれば、水分栄養補給をどうするか? 「説明と同意(ICC)」の場面となる。「管」か、手足の「静脈」か、それとも「中心静脈」經由か。

江口の担当患者の場合、ある家族は「管」栄養を拒否し、手足の静脈からの点滴のみを許容した。江口は今まで、全ての「延命処置」を絶つた事例を経験していない。キーパーソンで入院フィーを支払っている介護人は、自身も高齢で健康を心配するからである。

自分の意思・言葉を相手に伝えられない、動けない全介助の人でも、水分・栄養が、管あるいは静脈経路で与えられれば、時々の感染症・心肺不全症・腎不全症 吐血や下血をクリアさえすれば、「寿

命の終焉」まで生き長らえる(生かされる)。「この事実は大昔では考えられなかった現象である。

「本来の死」の状況とは、「ざわざわしない静かな場所で、口から食事を摂れなくなれば口を湿らす程度にして、断食みたいな状況で、「心肺停止」を迎えたである。だが、身内の苦勞は並大抵でない。現代でも、「在宅」で「死」を迎える場面では、かかりつけ医あるいは在宅専門医による対応と処置があるにしても、自然の経過で「看取る姿勢」にはいささかも変化は無い。医療経済からかなり安上がりである!

現代の病院での「病院死」と「在宅死」とは随分かけ離れたものである。この要因は、病院に入院すると、医師から「治療」という名目で「生命維持」のための要請を、家族は受け入れざるを得ない。同時に、切羽詰った状況下で家族の必至の願いから必要な「延命処置」を容認させられるからではないか。患者の「生命

を第一と考えて行動する医療人の習性を第一と考えて行動する医療人の習性(DNA)がある。

「尊厳死」に関する「リビングウィル」の本人自署の書類に「延命処置の中止」の条項で、医療側は「承知しました」と、経口からの摂食、点滴による輸液、あるいは管から水分・栄養を中止、あるいは不開始する「行為」を安易に実行できないだろう。「プロセス指針」を参照した準備が必要と考えられる。なぜなら医療側は「法的」に咎められないか心配するからである。

江口は以前神経難病の70歳後半の男性患者を受け持った。

神経内科専門医は、病状経過、進行した症状から「パ 病 連 患」と診断。患者は入院を繰り返し、内服治療中で、身体の運動機能は徐々に障害、日常生活動作は制限・障害された。本人は「治らない病」を自覚した。

家族思いの患者は、意識清明のとき、

家族への負担が少なくなるように、「延命処置」を断る書面を自ら署名した。口から食事を摂れなくなり家族は患者を病院中の急性期型病院に入院させた。担当医は「リビングウイル」の書状から、手足の静脈から補液を注入する「延命処置」を実施した。誤嚥性肺炎を生じたが抗生剤で改善した。入院期間が2か月以上に
なり江口の病院へ転院してきた。

入院時、不確かな言葉で、意味は聞き取りがたく、理解されがたい内容で、右手の指に触れると強く把握して離さない。左上肢・左下肢は屈曲性拘縮となり、ADLは低下し、全介助の状態へ悪化していた。

妻はあるとき、「リビングウイル」の書状を差し出した。

《治らない難病ですので、「尊厳死」に準じて『延命処置』を全て断ります》

江口は、手足の静脈から「補液」で「延命処置」を継続、体は衰弱し、筋肉は弱弱しく、静脈確保は困難となっていた。

ある日の午後、今後の「延命処置」の件で家族と面談する手はずであった。運悪くその日の午前七時ごろ、患者は「急性心臓停止」状態で発見され、当直看護師は当直医に連絡、自らベッド上で「心臓マッサージ」、「人工呼吸」の簡易の「心肺蘇生」をおこなったが蘇生されなかった。「延命処置」を希望されなかった本人にしてみれば、いきなり、胸をそんなに強くぐいぐい押せば、痛いじゃないか、肋骨はボキボキ悲鳴をあげているぞ、もう少しやさしくしてくれんか。おれの「書類」を見ていないのかね。突然、胸の衝撃にびっくりして、深い眠りを覚まされて苦笑したかもしれない。

医療人なら、当直の看護師の行為を当然の行為」と受け止め、非難はしないだろう。たとえ「リビングウイル」の書状があつたとしても、身体に深く染み付いた習性はそうさせたに違いない。

江口は、もし患者は生存され続けた場合、「リビングウイル」の書状の要請

を、どついつ風に折り合いをつけるべきであつたか？

「管」か、「点滴」か、はたまた「延命処置の不開始」か、難しい選択を迫られたことである。

しかし、患者本人は、意識清明で判断力があり強い意思表示で、自身、経口摂食を断り、管栄養・点滴による補液を断（た）ち、断食に入つて、「自決」という「死」を全うすることは、「尊厳死」の典型として、「法的」に咎められはしないであつた。

平成18年7月高名な「Y・A」という作家は、多発癌で闘病され、病院から在宅医療に切り替え、「SG」という作品を推敲されると、夫人のいるそばで、首に埋め込まれた点滴ポートを引き抜き、「自決」されたそつである。言うなれば「尊厳死」を完遂されたとも考えられる。

だが、多くの人は、終末期に意識は不清明で混濁する。意識清明時に自署され

た「書類一枚」が残され、医療側と家族側は、結論を下さなければならぬ。その書類を最大限尊重するにしても、基本的な水分・栄養補給を注入するのか、(段階的)不開始か? 「完全な中止」か、もし補給するとすれば「管」か、静脈(手足)からか中心静脈か? 担当医単独で判断・実行すれば糾弾される恐れもあり、既存の「プロセス指針」を参照して対応せざるを得ないのではないか……。

(2009・3・吉日、完)

「こんにちは・ひんじ」

木原 深雪

こんにちは。私は医療や保健の仕事も芸術も大切に生きてゆきたいと考えております。皆様と一緒を楽しませていただけたら幸いです。どっかよろしくお願ひ致します。

福岡市博多区千代4丁目31-3

(精神保健看護士)

扁桃腺手術始末記

陶 易 王

扁桃腺は、咽頭の入り口に位して外部からの細菌、ウイルス、異物の進入を防ぐ。軽い風邪などは扁桃腺が腫脹する事で、更なる炎症を防ぐ。だから扁桃腺は人体にとって防御的な役目を果たしているわけである。だが炎症を繰り返して高熱を発し、腎臓に影響を及ぼす様な時には薬剤以外に外科的な手術が必要になってくる。

だが、扁桃腺を切除によって咽頭の番人がいなくなり異物や細菌などが侵入して感染などを起こしやすくなる傾向がある。

大介は小さいときから風邪を引きやすく、小学校入学前に手術を受けた方がいいだろうと、6歳の時に扁桃腺切除手術を受けた。この事は、大介の心に深いトラウマを残した。

最近では、手術の前にインフォームド・コンセントと称して、患者に病名、手術の必要性を丁寧に説明し、本人が納得したら手術承諾書を書いてもらうのが常識である。

これで所謂手術ミスとして、様々なトラブルを起こすのを予め防げるのである。私が外科を始めた頃には、小児でもかなり理解力があると考えて病気を図解し、手術の必要性を丁寧に説明していた。

注射する時にも必ず説明し、決して嘘をついて騙してはならない。さもないと子供から強い不信感を持たれ、注射と聞けば泣き出す子供になってしまう。

近頃は、予防注射でもちゃんと説明することで、泣く子は少なくなった。

大介は、両親からは何の説明もなかった。手術されるとは露知らず、病院に連れて行かれた。

外来の診察台に座って口を大きく開かされ、咽頭粘膜に消毒薬を塗って、喉にいきなり長い大きな注射針を刺された時

には、何が始まるのかわからず判らず本
当に驚いた。

反射的に注射器を手で払いのけ、
「痛い！ 何をするの！ 嫌だ！ 止め
ろ！」

と、わめいた。

父親は狼狽して、耳鼻科の医者とナースとで暴れる子を力ずくで押さえつけ、無理に開口器を挿入し、強引に口を開かせ、扁桃腺切除手術器の針金の輪を咽喉に挿入して半ば暴力的に扁桃腺をひきちぎった。この時点では麻酔は全く効いておらず粘膜の剥離も不十分だから、痛み

ここにちは・ひんじん

出来 尚史

残生に彩りを添えんと思ひ、入会
を希望しました。し指導の程よろし
くお願いいたします。

千葉豊流山市向小金372-2

(内科)

も激しく、だーっと出血した。

耳鼻科医は慌てて咽頭にガーゼを詰めこみ、圧迫止血しようとした。この先生はこの様な、出血の経験はなかつたらしい。圧迫止血のガーゼで気道を塞がれ、呼吸が苦しくて手足をバタバタさせた。下手をすれば窒息、死亡している。完全な医療ミスだ。

母はチアノーゼで紫色になった大介を咄嗟に前屈させ、背中をバンバンと激しく叩いた。

大介は、凝固した血液の塊とガーゼと一緒にガガーと吐き出せたので呼吸が楽になり、しかし手術は不完全に中断して、終了した。

ナースが口に含ませてくれた水の塊は止血に役立つ様で、間もなく出血は止まった。

大介は一休みしてアイスクリームを食べ、タクシーで帰った。この耳鼻科医は父の友人で、腕がいいと評判だったが、此の一件で父にも母にも一挙に信頼を失

った。

その後、大介は診察台に座って白衣の人を見ると、暴力的な手術を思い出し恐怖を感じる様になった。子供の心に、こんなトラウマを残すのはよくない。

大介は扁桃腺を手術してから、風邪を引いても高熱を出さなくなった。

しかし気管支炎を併発しやすく、しばしば喘息様の発作を起こすようになった。最近撮った胸部レントゲン写真を見ると、慢性気管支炎で、軽度肺気腫の状態である。

扁桃腺手術の結果とは一概に言えないが、風邪を引くとすぐ気管支炎を起こしてしまふ。

近頃、小児科専門医を標榜する医師が少なくなり、子供の患者が増えた。

風邪を引きやすい扁桃腺肥大児の親に、手術をした方が良いかと、聞かれることが多いが、リュウマチや腎炎など合併の恐れがなければ、手術は慎重にした方がよいと、大介は返事する事にしている。

妄想による石川

啄木との対話

池田壽雄

Ｔ・石川啄木 1886年2月20日

1912年4月13日＝写真⑤

Ｉ・池田壽雄(1938年11月14日)

①＝④

Ｉ　ここにちは、初めてお目にかかります。冥土でゆつくりとお休みの所を、21世紀の娑婆に来ていただいて有難うございます。

Ｔ　いえいえ、どういたしまして。冥土はおつしやる通りに結構なところで、申し分ないのですが、変化を好む性分の人間にとっては退屈極まる場所ですよ。例えば、陳列棚に飾られているネクタイみたいなもので、やっぱり男の胸につけられて世の中の風に吹かれて動くネクタイの姿がいいじゃないですか。

Ｉ　それもそうですね。極楽が最高と世間の人は考えて暮らしているのですがね。
Ｔ　お風呂に入って、冷え切った体が温まるよ。
『ああ、いい気分だな。最高！』
という気持ちになることがあるでしょう。



天才石川啄木と「娑婆対談」する池田日染先生④



例えて言えば、極楽はそういう気分になつくりです。でも、実際には、お風呂から上がって、シャボンをつけ体を洗いたい気持ちにならないう。そうしないと、湯あたりしてノボせてしまいますよ。それが娑婆の姿です。
Ｉ　極楽の貴重な情報を教えていただいて有難うございます。

Ｔ　実に久しぶりに娑婆の方と話すことができ、嬉しいですよ。

Ｉ　啄木さんが亡くなられておおよそ100年たちましたが、和歌の名手として、全国的に有名になっておられますよ。

Ｔ　え？　そうですか。でも、私は有名になるために和歌を詠んだのではありませんから、そういうことばはつてもいい事です。

Ｉ　それにしても、『一握の砂』に掲載されている246首の歌を、1908年の6月23日から25日にかけて3日間で歌われたというのは信じられないことです。まさしく天才、啄木さんだと思います。

Ｔ　褒めて下さって有難う。でも、冥土に来てしまったら、天才とか鈍才とか、そういう娑婆の評価はどつてもいいことです。ただ、そういう才能を与えてくれた両親には感謝しています。

I 『東海の小島の磯の白砂に』

われ泣きぬれて蟹とたはむる』

の歌は特に有名ですよ。現在、『ビデオカメラ』という撮影する器具があるのですが、『ズームアップ』といまして、撮影している対象をどんどん大きくして撮影する技術があります。

『東海の』という言葉で、太平洋、つまりユーラシア大陸の東側の海という場所を説明する。つまり、『日本の』という意味に取れますね。『小島の』の言葉で、日本列島の一つの小島を呼び出す。『磯の』という言葉で、さらに島の場所を鮮明にする。『白砂に』という言葉で、島の更に一部を明らかにする。『われ泣きぬれて』という言葉で、初めて作者の自分がどういう状態かを伝える。『蟹とたはむる』で、作者自身が行っている行為を明らかにする。つまり、見事にズームアップが行われています。

これが、綺麗に『五七五七七』の句におさまっている。本当に素晴らしいです

ね。これを数分間の思考で可能にしたというのは、天才でなくては誰がするでしょうか。

↑ それは褒めすぎだと思います。私はただ瞬間的にそついう映像というか、画像が頭に浮かんだから句にしただけという記憶しかありません。大体『歌人』という人種は、そのように分析しながら歌を作るわけではありません。分析すること、歌を詠むことは、『ゴルフのプレーを報道する人』と、『プレーしているゴルファー自身』と位に異なつた行為であることを世の人は知らなくてはなりません。

だから、ゴルフの批評家に、そついうのだつたら、あなたがプレーしたらどうですかと質問したら、決まって口ほどにはプレーできないものです。和歌の批評をするのは楽ですが、作るのはどれだけの苦労があるものか、貴方は知っているのですか。

I おつしやる意味はよく理解できません

す。情報時代になって、世の中にコメント（意見）を述べる能力を持った人々がやたらに増えてきました。その副作用がそろそろ問題にシなくなてはならないのではないかと私は思っております。

今や、ゴルフのクラブを握って、ゴルフを楽しむ人口よりも、テレビでゴルフの番組を見て楽しむ人の実数をはるかに多いと思います。

ゴルフの番組のスポンサーは、その辺りの事情をよく心得ていて、スポンサーになつてテレビ局に大金を支払っているのだと思います。

↑ つくづく変な時代とは思いませんか。

I 話題がゴルフに逸（そ）れましたから、元の、和歌の話に戻らせていただきます。先の、『東海の』の歌には、色々な秘密が隠されていると私は思います。

1 大と小の対比＝海は大きい 島は小さい

2 色彩の対比＝海は青い 砂は白い

3 湿度の対比＝海は湿っている 砂は乾燥している

4 動と静＝蟹は動く 砂は静か

5 センチメンタリズム＝泣き濡れる 戯れる

6 音韻の反復＝「東海」のオ 「小島」のオ

＝「われ」のア 「泣き」のオ

「蟹」のオ 「戯れる」のオ

＝「東海」のノ 「小島」のノ

「磯」のノ

和歌は歌ですから、当然、発声して鑑賞しなければなりません。すると、音韻の反復の効果をたやすく知ることができません。

また、東海という『海』と、歌から推算される一滴の『涙』の対比が、この和歌には隠れていると思います。巨大な大自然と、われという小さな存在の対比でもあります。

↑ なるほど、和歌の世界の秘密を明らかにしてくださって、作者としては正

直言って嬉しいです。

名歌には必ずテクニクが隠されています。そして、作者の心情がストレートに歌を鑑賞する人の心に響く必要があります。けれども、技巧を凝らせば凝らすほど、その直接性が失われていく欠点があります。シンプルがベストなのです。そこいらは紙一重の世界です。

『研く作業』と『削る作業』は似ております。和歌は研がなくてはなりません。

『磨く作業』と『削る作業』も似ております。和歌は磨かなくてはなりません。『研ぐ』とは、矢の鏃（やじり）を鋭く尖らせる作業です。歌は鑑賞する人の心に刺さっていく矢に例えられます。優れた歌は、読んだ人が生きている間、忘れ去られることはありません。矢が抜けないからです。

『磨く』とは、歌人が自分の心を磨く作業です。そこにやましい物が隠れているならば、読者は容易に感知します。ですから、優れた一首の和歌の後には、膨

大な数の和歌があったと推定して間違いありません。もし、100年の時間が経過して一首でも、国民が愛唱していたなら、その歌人は成功者だと評価できるでしょう。つまり、その一生に意味があったということになるでしょう。

優れた歌を作るためには、適切に指導する人がいなくてはなりません。最高の指導者は『読者』です。でも、『一方通行』の欠点がありますから、作者が上手に指導を受けるのは困難です。もつ一つの指導者は『歴史』だと思います。でも、作者が生きている間には、実現されない恨みがあります。私の作った歌が100年たっても、母国の日本人に愛唱されていると知らせていただいて、こんなに嬉しいことはありません。作者員利で嬉し

いです。

Ⅰ 一つ質問して宜しいでしょうか。『格差社会』について、啄木さんはどう考えられますか。100年たっても、国民に愛唱される和歌の名手としての意見

を聞かせて下さい。

「『格差社会反対』というのは、票が欲しい政治家の言い出しそつな言葉だと思えます。格差は大いに結構、そのように私は思います。短い期間の教育で、大きく成長する才能を持った人がいます。神様はそのように作っておられるのです。」

「『一つ一つ私は政治家には向かない人間だと百も承知しています。政治家が行う行政は、『機会の平等』にとどめるべきです。』結果の平等』を凡庸な庶民はとかく求めます。また、それが『自分には実現できる』と厚かましくも平気でウソをつける政治家に喜んで庶民は投票します。だから、民主主義は政治的には庶民広く受け入れられているのです。」

文化の世界では、『結果の平等』なんてありえませんが、そもそも才能が不平等なのに結果の平等を求めるのは、『水は高きより低きに流れる』といったの逆らう行為だと思えます。文化は、作る側と鑑賞する側の二つに分かれると思えます。才

能ある人間は『作る側』に属すればいい

し、才能がない人間は『鑑賞する側』に回ればいいのです。共に、仲良く文化を楽しめばいいのではありませんか。

現代の教育は、『作る側』をたくさんにするのが良い政治だと勘違いしているのではありませんか。

『作る側』は文字通りのエリートです。凡人の数百倍の難関を突破する才能が要求されます。有名人は『ロコゴルフ』の『石川遼選手』がその右代表です。残念ながら、2009年4月の『マスターズ・ゴルフ・トーナメント』では6オーバーで予選を落ちましたが、彼のプレーを楽しんだ日本人は数百万人いたのではありませんか。ゴルフはスポーツの一種ですが、今や代表的なエンターテイメントになっております。

和歌の世界でも、全く、その点では共通しております。才能がある若者はそれを伸ばせばいいし、ない者は作品というか、結果を楽しめばいいのです。私はそ

のように考えています。

「I 貴重なご意見を有難うございました。石川啄木さんが、同じ姓の石川遼選手について、最新の情報をご存知だとは知りませんでした。本当に驚きました。」

今日は、冥土でゆっくりとお休みのところを、ここに来ていただいて、しかも貴重なお話を聞かせて頂いて有難うございました。心から感謝申し上げます。ご冥福を心からお祈り申し上げます。

(2009年4月13日記す。石川啄木の命日の日に)

4月の文学忌

- | | |
|------|-------------|
| 4月1日 | 三鬼忌 (西東三忠) |
| 2日 | 連翹忌 (高村光太郎) |
| 5日 | 達治忌 (三好達治) |
| 8日 | 虚子忌 (高浜虚子) |
| 13日 | 啄木忌 (石川啄木) |
| 16日 | 康成忌 (川端康成) |
| 20日 | 木蓮忌 (内田百閒) |
| 30日 | 荷風忌 (永井荷風) |

比翼の鳥

福 富 清 子

「近所の方で、お能や俳句に造詣の深いO・K夫人と親しくさせて頂いてい
ます。奈良ご出身の夫人は、奈良女高師
付属小学校で東大寺前管長と同級。東大
寺境内を我が家の庭のごとく、そこで存
分に遊ばれたとか。

その方が、昭和30年代に「医家芸術」と深く関わっておられたという高橋希人氏の歌集「思念」をお貸し下さいました。かような事を医家芸術事務局にお伝えしたところ、さっそく「医家芸術10周年記念誌『ゆかり』」に掲載された同氏の作品10首のコピーが送られてきました。氏は、当時の本誌短歌欄のほか随筆にも健筆を振るわれていたそうです。いずれ夫人にもお見せして楽しい語らいの時を持ちたいと楽しみにしています。

と云うので、今回の俳画の句「春の闇

比翼の鳥の味寝(うまい)せむは去る3月26日

芭蕉 蕪村研究第一人者
尾形ゆきさん死去



芭蕉、蕪村ら近世俳諧研究の第一人者、尾形ゆきさん

(おがた、とむ)さんが28日午後9時4分、多臓器不全のため横浜市内の病院で亡くなった。89歳だった。通夜は28日午後6時、葬儀は29日正午から川崎市麻生区高石1-23の8の百合丘セシエホールで近親者で行う。喪主は長男敏明さん。能勢朝次、頼原退蔵らに師事して俳諧を実践的に研究。東京教育大、名城大で教授を務めた。山形県・本間美穂節の「蕪村自筆句稿帖交屏風」(はらまぜびょうぶ)を手がかりに蕪村の自筆句帳を復元・推測した74年の「蕪村自筆句帳」(読売文学賞受賞)は、蕪村研究で画期的業績と評価される。著書に「歴の文学」「芭蕉

を取り上げられています。作者は尾形雅子、尾形夫人でした。夫人は二十年余歌道に勤しまれ、その間の作品を歌集『夜の泉』にまとめ、十月末、花神社から上梓されていたのです。その中には用例のとおほしき中より語意を汲むと腐心の夫に父が重なるまっすぐに真中を目指す夫に添ひななめ道草わが止みがたく藤吉郎とあだ名さづかりわが猫の主の席を占めて温む夫は外にわれは内より窓を拭くなほいささかの曇り惜しみて二人きりの暮しにあればわが病むは非常事態を夫蹴起せり流し台低きをかこつ丈高き夫のごこみてもの刻みをり折りをりに想つべくなりぬ「美しきひと葉」となりて地にかえらむを人みな神仏に見ゆ病むわれになし得るはただ「感謝」あるのみ

2006年11月5日付朝日新聞「折々のつた」で大岡信氏が縁かな五十五年を眠りをりし

用例カードいま夫の手に

など、戦争、平和、大学紛争、オーム

肉親友人趣味の草木染め等とともに、家庭内で尾形先生が猫と戯れる姿や、ガラス戸を夫婦が内と外から磨きあつ姿など、まことに微笑ましい情景が描かれています。こんな素敵な歌を詠まれる奥さまと大学者のコンビが、この世のものと思えない程でした。

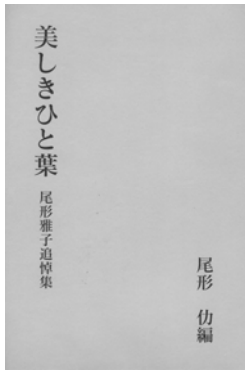
ところが、その年も押しつまった12月26日奥様が「他界になったのです。お一人の間の最後の約束が、『江戸時代語辞典』の完成」だったとかがいました。

私は、夫人のご逝去を悼み「霜刃えて比翼の鳥の片羽落つ」と詠みました。

『江戸時代語辞典』は昨年11月、着手から70年の歳月を経て遂に角川学芸出版より刊行されました。そして奥様の三回忌を前に追悼文集『美しきひと葉』が出版され、「もう思い残すことはない」と先生にどつとお疲れが出ないことを周囲が念じておりました。

2月、腰痛で入院 リハビリ順調との

ことでしたが、容態急変 わずかな可能性にかけての手術も空しく、彼岸へと旅立たれたのです。



姪御さんのお話です……

「伯父を見守るために、集中治療室の隣の部屋に一人で控えている時に、私は確かに伯母が優しい声で『あなた、そろそろこちらへいらしたら』』というのが聞え

たのです。伯父は楽しくて仕方がないという顔で眠っています」

私は、感動でソツとしました。あり得ることと思えました。そして

彼の世よりの花の便りにゆき給ふ春の闇比翼の鳥の味寝せむ

とつたない悼句をノートに記しました。奥様の時と同じく、唐の玄宗皇帝・楊貴妃をつたつ白楽天「長恨歌」の

「連理の枝 比翼の鳥」

にならつたものです。表現が今様から遠く離れていることは承知の上、今自分の胸に惻々と迫る思いをそのまま吐露してしまいました。

尾形尙氏が新宿の朝日カルチャーセンターで「蕪村を読む」を開講された1990年から、先生がご体調の関係とライフワークに集中すべく閉講となる2002年まで、その警咳に接しました。

田村と芳賀の因縁

田村 豊 幸

まえがき

物事はすべて、その起源(因)と果を結ばせる作用(縁)とによって、定められている。運命なるものがあると言われている。

その通りだと思つ人もいれば、そんなことはないと思つ人もいるし、わからないといつ人もいる。

この話は、その通りだと思つ派の人の話である。

私は大正十一年十二月十九日に、昔京の都から天皇に配流された人が来た栃木県東南端の芳賀郡の真岡市に生まれた奈良時代の栃木県は想像を絶する未開の土地であつたらしく、芳賀といふのは、茨城キリスト教大學、志田諒一教授によると、荒墓(はか)の文字をきらつて芳

賀の好字に改めたのではないかといわれている。

箱根の關所を越えた所から見ると一面の縹渺たる荒野にひろがる無数の古墳を目にした關西から北上した人は、そつ思つのも無理はなかつたかもしれない。

話は新しくなるが、明治天皇が京都から東京へうつられたときも、箱根までが文化的和人が住む土地で、それを過ぎて北進すれば蝦夷地に近づくにつれて不安の増す土地とされていたといふ。

さて、芳賀氏のことであるが、史上これが正式に現われるのは次のよつである。舍人親王^二御原王 小倉王 清原夏野(七代略) 清原高重(從五位下大監物寬和元之西冬蒙花山天皇勅勅下野国^一遠流サレ芳賀郡鹿嶋戸郷松原之里^二居入長保元己亥十二月二日(九九九)空京泉北野^二葬ル)

この清原高重のあと六代統いて清原高澄の代になつたとき白河天皇の承保二年

(一〇七八)に下野へ戻つてきたとき、即ち高澄の代に「芳賀初代」ときめたのである。清原姓を芳賀姓に変えたのは、大前神社という当時その土地を中央で管理していた社領の領主になつたためと考えられている。

延喜式内神社の宮司は、その地方の神の祀を担当し、治安行政は武士が担当していたのである。

ところで、第65代花山天皇だが、この天皇の父第64代冷泉天皇は、『栄花物語』によると、藤原族主催の天皇競争に負け憤死した広平親王の怨霊に祟られて発狂したと記されている。花山は自分こそ64代天皇になれるかと思つていたら、目の前で円融に奪われたので、ひどく落胆した。

さて花山天皇はある日、側近だつた天武天皇の系統である清原高重をフトしたことで怒り(勅勅)下野国へ配流した。清原は下野の芳賀の地へ住みついた。

高重については前述したが、高重が配

流されるとき、それについて来たのが田村の先祖と伝えられているから、私は、清原のあの芳賀とも因縁は浅くないと思つたので



ある。そのた
め、かつ
て「花山
天皇」と
いう一書

を、まとめた。(平成十一年、大阪美健力
イド社発行)

芳賀善次郎先生と会つ

昭和四十二年新宿区市谷薬王寺十一に住む芳賀善次郎先生の「芳賀氏変遷氏」という著書がある。芳賀先生は山形県西置賜郡鮎川村現白鷹町九九一〇八三に大正四年に出生され、この本を世に残され、そこに私は概略次のように加えさせていただいたのである。偶然の因縁の偶然と思われることが起こったので、そ

れをあげてみる。

芳賀善次郎先生が昭和十九年、集団疎開させられた所が、ご先祖の領地だった芳賀郡であることがその第一。

長い間、私がおつきあひした栃木県文化財保護委員佐藤行哉先生に、先生がお亡くなりになるすぐ前、芳賀の殿様のことが急に気になって、いろいろ教えていただいたこと。

芳賀先生がまだ調査されていない場所だった、会津・常陸・出羽・筑前と、芳賀氏旧跡のある地元から、薬理学の講演を次々にたのまれたので、まったく経費をかけることなくその土地へ行くことができ、芳賀先生のご調査をお助けすることができたのがその第二。

芳賀氏の始祖、清原高重公は花山天皇の勅助により下野へ配流されたが、今年の京都薬学大会に出席の際、学術視察の場所が花山天皇御陵のとなりで、しかも附近の地名と下野芳賀の地名とが酷似していることを発見したが、その第四。

芳賀一洋氏と会つ

芳賀善次郎先生と会えたことは、私にとつてたいへん重要なことだが、不思議なことがさらに起こった。

それは白河・芳賀重広の子孫芳賀一洋氏との奇遇である。平成八年五月のことである。朝日新聞が渋谷・ハルコで芳賀一洋による「八〇分の世界・木造機関庫たち」という展示をやることを写真つきで報じていた。

説明は「昭和初期の機関庫や駅舎・給水塔・作業小屋・タクシー会社などの木造建築を実際の八〇分の一の大きさで再現した約三〇〇点の風雨にさらされ、さび付いた煙突やまくれ上がったタン屋根など、芳賀一洋氏によるノスタルジックな作品」とあった。

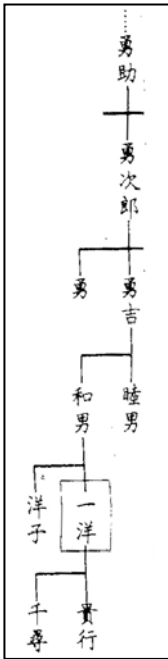
私の曾祖父直七らが真岡線の敷設に苦勞したことを思い出していた。展示台の上には、私の少年時代の真岡停車場付近そっくりの光景が、ずらり並んでいた。



かつての真岡にあった鉄道ステーション

お盆休みで帰省したとき、当時の真岡の菊地恒三郎市長に、その作品のことをお話しした。菊地市長が汽車好き市長であることは、私もむかしから良く知っていた。かつて、真岡線に汽車を走らせることで、協力したこともある。おかげで、むかしの真岡停車場付近の超精密模型を、芳賀氏が精魂こめて制作することになり、現在、真岡駅構内に展示され、多くの人を釘づけにしていることは、うれしい限りなのだ。

後日、それらの作品を作った芳賀一洋氏が、系図に示した芳賀十一代高直の弟・重広の子孫であることを知った。一洋氏は五代前から系図が明らかである。しばらくして、一洋氏から次のようなおたよりをいただいた。



「私の戸籍上の本籍は白河市道場小路一六番地で、祖父・勇吉の時代、明治四十年頃、東京に出て居をかまえました。母は上三川町の出身で、幼少の頃、母の里帰りのとき、かならず私も上三川に連れられ、鬼怒川や小川や山を駆け巡ったものです。そんなある日

『今日は真岡へ行くよ……』

突然母が言い出し、一里の道程を自転車の背中にゆられ、広い大きな庭のある真岡の農家宅に一度だけ、おジャマしたことがあります。

その頃の情景は今もクッキリと私の脳裏に刻まれているようで、ジャラジャラとクサリで汲み上げる方式の暗くて恐ろしい井戸や、白つちやけた矢野バスの終着駅舎、その脇に建っていた大きな木造倉庫など……それら全

部が、最近急に作り始めた私のストラクチャーの土台になっているよ、